



2024 年 12 月 1 日 発行
(通巻 503 号) 定価 100 円

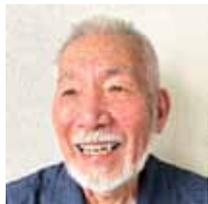
現代座レポート No. 100

- ・「出航」公演 (1)
- ・『出航』によせて 木村快 (2)
- ・会員の集いの報告と「出航」公演への協力をお願い (3)
- ・「ブラジル・ユバ農場から珍しい来客」 木村快 (4-5)
- ・「バラエティ劇場を終えて」 今村純二 (6)
- ・町会・防災講座 / 高齢者学級・演劇体験 (7)
- ・お知らせ・会館日誌・会員入会・継続・寄付 (8)

NPO 現代座ホームページ <http://www.gendaiza.org/>

特定非営利活動法人 NPO 現代座 発行責任者：木村快

〒184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号 TEL 042-381-5165 (代) FAX042-381-6987



今村 純二



伊藤 嘉朗



杉山 龍



木の下 敬志



八木 浩司



永野 和宏



廣瀬 正仁



山中 宏明



上村 遥



江川 泰子



木下 美智子



環 幸乃



那由多 凜



長谷川 葉月



矢川 千尋



野田 詩



黒澤 義之

作 .. 木村 快
音楽 .. 岡田 京子
演出 .. 八木 澤賢

出航 2 幕 5 場

魚の捕れなくなった、いわば展望のない海へ船出していく遠洋漁船があった。それがなぜか悲壮ではなく、ウキウキした陽気な気分を漂わせているのだ。あれは 1980 年代のことだが、豊かさにあふれた社会は次第に姿を消し、国際的な漁業規制などで漁業の未来も厳しくなってきた。海に見切りをつけた漁船員たちは、陸の仕事を探して歩き回った。しかし、日銭を稼ぐ仕事でもさまざまな屈辱を味わったし、愚痴をこぼせばすぐ追い出された。働く力はあるのになぜだ。そうだ、仲間がいない。船の生活は厳しかったけれど、嵐に襲われた時も力を合わせて戦ったし、帰港を待ちわびる街の人々とも仲間同士だった。彼らは腹を決めた。

♪「北の海へ行ってまた働くよ。どうせ果てるなら海で果てるよ」

1日	土	14:00	
2日	日	14:00	
3日	月	14:00	
4日	火		18:30
5日	水	休演	
6日	木	14:00	
7日	金	14:00	
8日	土	14:00	
9日	日	14:00	

2025 年 2 月 1 日 (土) ~ 9 日 (日) 現代座ホール

参加費 一般 4000 円 学生 3000 円 予約制 予約フォーム

ご予約 TEL:042-381-5165

FAX:042-381-6987

MAIL:gendaiza.ticket@gmail.com



『出航』によせて

木村 快

魚のとれなくなった、いわば展望のない海へ船出して行く一団の漁師たちがいる。それがなぜか悲壮でなく、むしろウキウキした陽気な気分をただよわせているのだ。男たちだけではない。見送る家族や関係者も手を振って送っている。

海からの風に歯をガチガチふるわせながら、ふっとわたしの脳裡に、そんなありうるはずのない光景がすすめた。

◆ ◆ ◆

これは前々号（レポート98号）で記述した石巻港に停泊している漁船団を目撃したときのことである。この時（1975年）、日本の遠洋漁業は各国二百海里漁業禁止条約などで深刻な打撃を受け、崩壊しつつあった。ぼくは1970年以前から北海道函館を中心に遠洋漁業の調査をしていたから、まだ生き残っている船があることに目を見張った。

1970年には取材のために函館ドック造船所の臨時工として失業漁船員たちと一緒に働いたこともある。遠洋漁業は大変特殊な職業で、漁船員たちは一般社会とは全く切り離された時間と空間で生きていたから、他の職業に転職することは簡単ではなかった。石巻のあの船団だと百人前後の漁師が働いているはずである。いったい彼らはこれからどんな道を進むのだろうか。

身動きもせずたたずんでいる船団を見つめながら、なぜかぼくは『北の海へ行ってまた働くよ』という詩を書いていった。それはぼくら自身が失業者集団から始まった劇団だったからだろう。この詩が1981年の上演作品「出航」の骨格となった。

あれからもう50年も経った。あの時は漁業界の問題として見ていたけれど、今思うと、実は人類の直面する将来を暗示していたのだ。

あの時の漁業界は石油価格が安く、エレクトロニクス技術による漁法の進歩、そして鋼鉄船の大量生産が進み、世界に誇る大漁業国として名をはせていた。しかし、ドルショック、オイルショック、そして各国沿岸二百海里規制と追い打ちをかけられ、船主たちは多額の負債を抱えたまま身動きできなくなり、廃業廃船が進んでいた。

振り返って現代はどうか。それぞれが便利なスマートフォンで自分だけの世界を作り、犯罪を複雑化させ、政治状況を混乱させている。

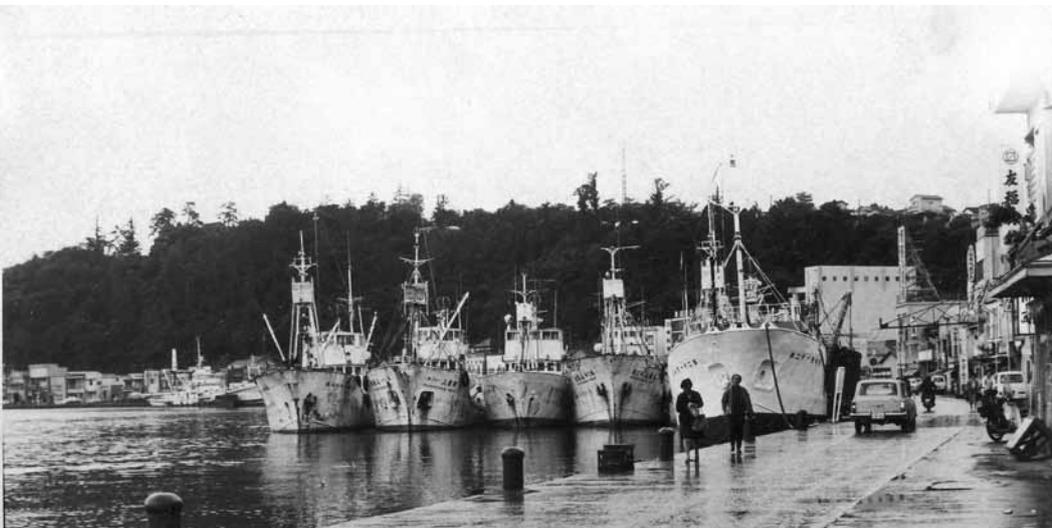
便利な社会を求めて地球温暖化を進め、その結果、災害が連発すると、もう引き返すことは出来ないのだと叫んでいる。そしてやむことのない国同士の殺し合い……。

人間は自然に適応した生き方を捨て、目先の便利さばかり目を向けてきた。そのため便利な世の中になればなるほど生命力を低下させるというきわめて矛盾に満ちた状況に立たされているのだ。

魚のとれなくなった海に出かけて行くことは、漁師にとつては辛いことだが、それでも彼らが「自分は海でしか生きられない」と思っていることに、わたしは救いを感じる。そこでしか生きられない人間だけが、自らを強くし、自然との共存の道を見出すだろう。

いったんは海から逃げ出そうとした漁師たちが、結局はよくても悪くても自分の生きる場所は海であることを知って、ふたたび海にいでむ姿をわたしは見たいと思った。その船出はきつと悲壮なものではなく、共通の運命を自覚することによって、孤立から脱却し、

かつてはおびえた海に、生きるためのあらたな戦いをいどむ新しいロマンが息づいているはずだ。
人間は連帯することによってもつと強くなれる。そして自然と共存する道を見つけ出すだろう。わたしはそう思いたい。わたし自身のために、わたしにつながる仲間や、仲間の子供たちのために。



◆この写真は東日本大震災以前の1975年。たまたま石巻港に停泊中の漁船団。休暇のため年に1度は母港へ帰港するらしいが、こうした船で1年も2年も魚を求めて世界の海を航海するという遠洋漁船団の姿である。

会員の集いの報告と 「出航」公演への協力をお願い

大分前の事になってしまいました。4月21日(日)に現代座ホールで「NPO現代座会員の集い」として、山田洋次さんの映画「同胞(はらから)」の上映会をやりました。

現代座にはいつも「現代座レポート」の発送のための封筒入れをしてくれている協力者がいます。小金井周辺に住んでいる会員さんで「武蔵野の歌が聞こえる」公演の時に「サポーター」として宣伝やチケット売り、当日の受付などの手伝いをしてくれました。そして公演が無い時でも「現代座レポート」の発送作業をしてれています。

作業をしながら雑談する中で、ずっと現代座と関わってきたこの人たちが映画「同胞」を観ていない事が分かりました。考えてみたら劇団の歴史も伝えていなかったのです。



映画「同胞」上映



そこでまず現代座(映画撮影時の劇団名は「統一劇場」)の活動を映画にした「同胞」をみんなで見てみよう、ということになったのです。

ごく内輪の上映会ですが、せっかく上映するのだからと「現代座レポート」で会員の皆さんに呼びかけました。そうしたら何と30人の方が集まってくれたのです。最近現代座を知った方もいますし、この映画が出来た1975年から何度も見ている人、その頃実行委員として公演を取り組んだ人。遠くから来てくれた方も。

上映後、輪になって語り合ってみたら、映画の感想だけではなくそれぞれの現代座との関わりのお話もとてもおもしろかったです。「楽しかったね、また集いをやりたいね」と解散しました。

わたし自身も久しぶりに「同胞」を見て、集まった方の話を聞いて、改めて色々な事を考えました。

私たちはずっと「劇場をつくる」と言ってきました。俳優として「芝居を見せる」のでは無く「集まったお客さんといっしょに呼吸して、そこで生きること」を大切にしてきました。

でも「劇場をつくる」のは俳優やスタッフだけではできないのです。お客さんをどう集めるのか、人と人との響き合いを創り出していく呼びかけが必須なのです。

地方で公演する時には、映画「同胞」のように、主催者は財政責任をもって必死に取り組みます。でも現代座ホールでの公演では、協力するということになりません。それでも、すべての情報がネットで手に入る時代に、人から人に具体的に呼びかけて、いっしょに芝居を見ることには大きな意味があると思います。

そして公演に協力しようと思った人達が顔を合わせ語り合い、お互いを知り合っただけで広がりを広めていくことは、とても大事な事なのではないかと改めて思いました。

そこで2月の「出航」公演では、公演に協力出来るという人たちに集まってもらって、いっしょに準備していくことにしました。

チラシを配ったり宣伝したり、チケットを売ったり、受付や終演後の交流会を手伝ったり。「全部は出来ないけど受付だけなら」とか「チラシは配れる」という方も大歓迎。

とにかく「出航」公演を成功させるために力をあわせる会を作ろうと、11月20日に最初の集まりを持ちました。集まった人は8人でしたが、協力して下さる方は15人近くになりました。これから「出航」について勉強したり、稽古を見学したりしながら、つなかりを広げていきたいと思えます。

どなたでも大歓迎です。協力していただける方は、気楽に現代座にご連絡ください。

舞台の裏方として小道具を作ったり稽古の雑務を手伝ってくれるボランティアスタッフも募集しています。こちらも興味のある方はご連絡ください。

(木下美智子)



【アリアンサ通信】
ブラジル・ユバ農場から珍しい来客

木村 快

日本体育大学のコーチング・エクセレンスの助教として働いているユバ農場出身の矢崎ナツから「今、サチ工一家が日本に来ていて、快さんに会いたいと言うから現代座に連れて行く」と言ってきた。そして11月16日、矢崎ナツが弓場幸恵（サチ工）と夫のラファエル・ネボ、それに1歳5ヶ月の有徒（ユート）を連れて現代座を訪ねて来た。

◆ユバとの出会い

私をはじめユバ農場を訪ねたのは1978年で、まだナツやサチ工の親たちが若者として飛び回っていた頃だ。

私はアマゾンやサンパウロで日系人を訪ねて取材を続けていたが、すでに日系人の家族の中では子どもたちは日本語がしゃべれず会話は難しかった。ところがアリアンサのユバ農場へ行ったら、子どもたちが裸足で走り回っていて、それがみんな日本語で話しているのでびっくりした記憶がある。まるで昔の日本を見る

ようだった。

この農場では学校に入るまでは全く日本語だけで育つのだという。みんなで農業をし、祈り、歌や踊りや芝居、絵画のスケッチなどに日常的に取り組み不思議な集団農場だった。

◆弓場創立世代から三代目

ナツは2005年に来日、日本体育大学で働いている。今度訪ねて来たサチ工はユバ創設者・弓場勇の孫だが、2010年頃、幼稚園保育士の研修で来日したことがある。だから彼女は現代座の公演にやってきたこともある。

ラファエル・ネボはサンパウロ市でデザインや撮影の仕事をしていてユバの資料整理や撮影を手伝ううちにサチ工と結婚して、ユバ農場で暮らしている。彼のおかげで私たちは現在もユーチューブでユバ農場の映像を観ることができる。

◆アコーディオンを贈る

昨年、ナツの母ケイコ（矢崎恵子）が愛用していたアコーディオンが壊れたと言ってきた。そのアコーディオンは1996年に私と一緒にユバ農場を訪ねた作曲家の岡田京子さんがプレゼントしたものだ。それをケイコが一懸命習得してユバの奏者となった。

ユバ農場では農作業の合間、みんながフルートやピアノを練習し、クリスマスにはサンパウロ州一帯から共鳴者を招待して、ナタールの舞台で発表する。ケイコがいつもアコーディオンで伴奏していた。

そこでユバに新しいアコーディオンをプレゼントすることにした。現代座の今村純二がユバで使っていたものと同じイタリア製の

アコーディオンを見つけられた。ナツは年末にブラジルに一時帰国するのでそれを持っていくことになっている。

◆アリアンサ移住地・ユバ農場

ユバ農場はブラジル・サンパウロ市から400キロ奥のアリアンサ移住地に存在する不思議な協同農場である。わたしの取材ノートには「20家族90人くらいの協同農場で、全体がひとつの家族のように財布をひとつにして暮らしている」と記入している。

そもそも「アリアンサ」という地域が大変珍しい地域で、1923年（大正12）、長野県において、民間人が資金を集めて設立した協同組合によって購入された地域である。ちなみに「アリアンサ」とはブラジル語で協同を意味する言葉で、これは当時の国策によるブラジル移民に対する批判から生まれた運動体である。

当時、すでに日本ではサンパウロ州政府の外国移民導入に対応した日本の国策会社・海外興業によるブラジル出稼ぎ移民が始まっていた。しかし、いったん送り込まれると、その後はすべて移民自身の責任となり、結果的には帰国はかなわぬ棄民政策だった。そこで日本政府の棄民政策と戦うには協同組合方式をとるべきだと考え、政府の機関にも進言していた。その中心になったのが日本力行会だった。

◆日本力行会

日本力行会は1897年（明治30）、東京でキリスト教の牧師、島貫兵太夫が苦学生救済のために開いたもので、日本力行会第2代総裁・永田稠はアメリカ留学時代、日本移民敵視政策で追い散らされる日本移民をとりまとめ、当時アメリカで広がり始めていたロッツデール式協同組合にまとめた経験を持っていた。

日本力行会は移住を目的とする海外学校を備えていた。

◆ユバ農場創設者、弓場勇のこと

海外学校に兵庫県名塩（西宮）からやってきた弓場



★左からラファエル・ネボ、サチ工とユート、木村快、木下美智子、矢崎ナツ



今村がナツに楽器の説明をしていると、最も興味を示したのはユート君だった。さすがユバの子。

勇という若者が学んでいた。地元の兵庫三田中学に野球部を組織し、関西では強豪校として知られていた。大変型破りの男で、トルストイを読んで協同農場を志し、父にブラジルで移住地を購入する資金の相談をした。父は名塩村長を二期務めた人物だが、これも大変型破りの人物だったらしく、「よし、それなら田畑を全部売って、一家で移住しよう」ということになったという。

そんなわけで1926年(大正15)、家族10人でアリアンサへ移住した。移住すると勇はすぐ地域の若者たちと野球チームを作り、村づくりを語り合った。そして各地の日系移住地の若者と連携をとり、やがて、独自の協同農場をつくった。それがユバ農場である。

◆日本政府の支援を受けられなかったアリアンサ
永田たちが政府に進言しつづけた「移住者のための移住地建設」は、ついに日本政府の支援を受けられなかった。昭和に入ると国策を批判する者は治安維持法で取り締まりを受けるようになる。さらに満州事変、日中戦争、大東亜戦争と破壊に向かって突進することになる。ブラジル移民社会でも少数派だったアリアンサは移民社会から無視されるようになる。

◆弓場勇の信条

弓場勇はブラジルの一角に日本人特有の文化を根付かせたいというのが持論だった。そのため若い芸術家に来て欲しいと呼びかけていた。それに応えて彫刻家の小原久雄とバレエ・ダンサーの妻明子がやってきた。これがユババレエ団の始まりだった。

1976年12月、弓場勇は自動車事故で亡くなった。70歳だった。だが農場は変わることなく生き抜いた◆連邦政府文化功労賞を受賞

ユバ農場は2006年、破産しかかったが、支援者たちの協力で政府公認のNGO(非政府公益団体)コムニダーデ・ユバとして再編成される。

2008年10月には長年のブラジル国民に対する文

化的貢献が評価され、連邦政府文化功労賞が贈られた。ユバ農場は協同農場らしさを失わず、食事の前には静かに黙祷し、自由に働き、訪れる人と共に食事、そしてこの集会所では映画を上映することも出来る。

◆「アリアンサ」の存在を知らない日系人

1994年、30年ぶりに故郷へ戻って、日本社会の大きな変化に驚くブラジル移住者を描いた「もくれんの歌」という作品を製作。これがブラジル日系社会連合から招かれ、ブラジル全域、北はアマゾン・ベレンから、南はクリチバまで13都市で大成功だった。

準備作業、裏方、上演予定地に飛んで準備を進めたのはユバ農場で、僻地から多くの日系人が集まつてくれた。彼らが接点となって「サンパウロの奥地にそんな農場があるのか」とユバの情報が広がった。

ブラジルの日本移民についての資料としては1991年に日系人の協会で編纂された「日本移民八十年史」がある。ところがそこにはアリアンサのことは全く出てこない。私は当時ユバ農場の資料担当

だったナツの父親マサカツ(矢崎正勝)とアリアンサの歴史をまとめる作業を始めた。

私はこの時の資料をまとめて2013年に日本で「共生の大地アリアンサ」を出版した。これはブラジル社会で話題になり、ついにポルトガル語に翻訳されて出版されたので、多くのブラジル人がアリアンサを訪ねてくるようになった。これで日本語の読めない日系人にも読んでもらえるホットとした。

◆子供たちにわかる絵本、紙芝居が欲しい

ところが、ユバで生活しているサチエやナツは「ユバの人たちは難しい日本語は読めないから、絵本か紙芝居を書いて欲しい。そうしたら子どもたちにも伝えられる」と言い、ラファエル・ネボは「ユバの歴史を快さんに話してもらって、それを映像に撮りたい」と言い出した。確かに子どもたちにも判るユバ農場とアリアンサの歴史を残してやるのは私の役割かもしれない。わたしはもうすぐ89歳。あまり時間は無いが頑張ってみようかな、と思っている。



(右) 2013年、日本で出版した「共生の大地アリアンサ」A5版350頁
(上) 常に働きながら、乞われると鮮やかに踊り、歌う農場員たち。
(中) 農場の食堂兼集会場は自由な懇談の場で、演奏会や映画上映の場にもなる。

「バラエティ劇場」を終えて
——平均年齢81歳の男たちの挑戦——

今村純二

◆そのきっかけは5、6年前にあった。林操君と電話で話しているうちに、「またなにか一緒にやりたいね」と言い合った。林君とは統一劇場時代一緒に舞台を踏んで苦楽を共にした、いわば旧い戦友みたいな男だが、事情があって劇団活動からずっと離れていた。当時はコントづくりにその才を發揮したものだ。

◆「八十歳を過ぎた我々がなにかを起こすには遅すぎだよ」と、内心では思っていたが、林君がひとり語り「すまねえな」を一時間ほどの上演可能な作品に仕上げた時、この「すまねえな」を軸にするのが、一番の早道だと思った。

だが、「すまねえな」は、重度の障がいをもった兄を、ついに認めることができなかつた林君の懺悔の思いを

テーマにした重い内容だった。だから心を解放できる第一部がどうしても必要だった。

◆四月、仙台に暮らす元劇団員の小笠原町子さん（旧姓・服部町子）に久しぶりで逢いたいということもあって、「ギャラは考えなくていいから、地域の皆さんを集めてくれないか」ともちかけてみた。「私のお小遣いの範囲でやってみる」との快諾をもらい、8時間かけて仙台まで出かけて行った。小笠原家のリビングに詰めかけた23人のみなさんの前で「お楽しみタイム」と「すまねえな」を上演してみた。これが大うけにうけて、大笑いと涙でみなさんが喜んでくれた。これに大きな力を得て、本格的に一步を踏み出す気になった。

◆人形劇場「花かご」の熊倉正博さんと木村康恵さんの二人をメンバーに巻き込んでスタートしたのは六月。第一部の構想も生まれた。「ボクたちの70年代」と題したのは60年を経て、もはや

高齢者！となつてしまった自分たちの姿をさらけ出して「でも、がんばろうよ」と、お互いを励ましあうことをテーマにしたかったから。

林 操 作 ひとり語り「すまねえな」

◆さらに、今村・林・熊倉の三人にとって今こそ歌いたい歌があった。これが平均年齢81歳の爺さまたちが歌う「恋の歌・マデデ」であり、70年代に好評だった反戦歌「兵隊が戦争に行くとき」と「腰まで泥につかって」だった。が、本来の声が出なくなつてしまった男たちにとっては、大きな挑戦だった。会場に大きな笑いを巻き起こした

のは、林君の「ごんべさんの赤ちゃん」や、花かごメンバーのおはこ「モンちゃんのお皿返し」だったし、木村康恵君の「手話」は紅一点の色どりとなって、第一部は楽しいものとなった。

◆問題は「誰に、どうやって見ても

らうか」だった。ところが、はじめに「クッキングハウス」（調布市）の松浦幸子さんに相談をもちかけると、「私がやってもいいかしら」という返事、つまりは「メンタルヘルス市民大学」の研修目的で、公演を主催するということだった。ありがたい申し出だった。

◆あとは、現代座3Fでの小劇場を2回。のちに、長野県の真田町と長野市でお任せ公演が決まり、松本市と安曇野市だけを今村夫妻が、暮らしている強みを發揮すればなんとかかなりそうだった。結局7回の公演はどれも成功までこぎつけることが出来た。それぞれの会場で、昔、統一劇場時代を支えてくれた懐かしい



モンちゃん 木村康恵

人達との久々の再会も果たせ、本来の目標は達成できた。互いに若かった時代に思いを馳せ、元氣な姿を確認し合えた素晴らしい時間となったのだ。



手話で歌う（松本市にて）



林 操 今村純二 熊倉正博



林 操 作 ひとり語り「すまねえな」

緑町第2町会

「今日から役立つ防災講座」

11月9日(土)午後1時半から現代座会館の2階会議室で、緑町第2町会主催の「今日から役立つ防災講座」が行われました。会議室いっぱい30人が集まって、防災士・対馬博子さんが在宅避難をするために必要な知識を、たくさん話してくださいました。

現代座も緑町第2町会の会員です。そして町会の役員会や総会は、いつも現代座の会議室でやっています。地域の方たちとつながって役に立ちたいと願っている現代座にとって、町会の活動はとても大切なものです。

講師の対馬さんは以前から現代座の公演を見に来てくださる協力者です。今年の春、現代座の1階で毎月一度開いている地域の皆さんのおしゃべりの場「緑町ふれあいサロン」に来てもらって防災の話をしてもらいました。とっても楽しく役に立つお話しでした。

そこで町会で講座を開いてもっと皆さんの方に防災の知識を持ってもらおうとなったのです。講座は大成功。皆さん、やらなければいけないことを具体的に考えるいい機会になったようです。

高齢者学級

『地域の劇団「NPO現代座」の劇場に行つて演劇を体験しよう』

9月20日(金)午前10時から12時まで、現代座ホールで地元小金井市の公民館貫井北分館の高齢者学級「はなみずき学級」の講座が行われました。「はなみずき学級」は5月から12月までの8ヶ月間、月2回ほど計16回の講座で、様々な事を学び交流を深める公民館主催の講座です。

公民館貫井北分館の担当者と企画実行委員の方から「現代座で何か出来ませんか？」と声をかけていただきました。いっしょに考えている中で「地元で現代座のホールがあることは知らない人が多いし、みんな現代座に行つて舞台上に立つてセリフを言ってみたら楽しいんじゃない？」という提案がありました。「それは面白そう。舞台上に立つて照明を浴びるなんてめったに出来ないから、きつと楽しい経験になるよ！」と私も気楽に賛成し、やる事が決まったのです。

せっかくの演劇体験だから、まず身体を動かして、発声練習も体験して、台本を読んでみてと夢は広がり、長谷川葉月さんが浅田次郎さんの小説「青い火花」をもとに5つのシーンの台本を創ってくれました。

参加者は30人ほどの高齢者学級の受講生です。現代座の簡単な紹介のあと、まずベテラン俳優の黒澤義之さんが「呼吸と声を出す事」について話して、みんな声を出してみました。そして長谷川葉月さんの指導で、場面ごとに舞台上に立つて台本を読んでもみました。これがびっくりするほど、大きな声だったり、

動きまでつける人がいたり、皆さんすごく頑張ったのです。講座は2時間なので、丁寧に繰り返すことは出来ず時間切れになってしまったのは反省点でしたが、参加した皆さんから「楽しかった！」と言っていたのでホッとしました。
(木下美智子)



長谷川葉月さんから台本の説明を受ける受講生たち。このあとシーンごとにチームを組んで、やる役を決めて打ち合わせ。そして舞台上に立つて、長谷川さんのアドバイスを受けながらセリフを言ってみました。

お知らせ TEL: 042-381-5165
FAX: 042-381-6987

信田さん 野菜ありがとう

「出航」手ぬぐいを作ります

2025年2月の「出航」公演では、創立60周年の感謝と、これからも応援していただきたい気持ちをこめて、『現代座「出航」手ぬぐい』を作ります。

公演中の会場で1000円以上のご寄付を下さった方に、お礼として進呈します。

公演に来られなくても、1500円以上のご寄付を下さった方に、ご希望があれば郵送します。

* 郵便振替口座 00110-7-703151 NPO 現代座
「手ぬぐい寄付」と明記して下さい。

ご寄付は築50年以上経った現代座会館の修繕維持、照明音響等の機材整備、公演活動資金に充てさせていただきます。

北海道北見市で農業をやっている信田直哉さんが、野菜を送って下さいました。信田さんは北見で何度も現代座の公演を主催してくれています。北見の大地で育ったカボチャ、玉ネギ、ジャガイモ、ゴボウなどは、とってもおいしそう！ありがとうございました。



現代座会館 9月～11月 活動日誌

9月7日 「木村快との雑談会」

14日 「現代座レポート99号」発送作業

10月9日 「木村快との雑談会」

31日 「川崎平右衛門顕彰会」理事会に参加

11月6日 「木村快との雑談会」

16日 ブラジル、ユバ農場より来訪
第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

【現代座ホール】

9月20日 「はなみずき学級」演劇体験講座

26～30日 「青年劇場」稽古

10月11、13、14日 「スタジオポラーノ」稽古

15～27日 「JACOBAL'S」稽古

11月21～24日 「劇好サボテンアミーゴ」公演

10月12、13、11月2、3日 現代座「出航」稽古

9月～11月 長谷川葉月独演会稽古

【三階小ホール】

9月14日 「こみ Cafe 寄席」

6、13、20、23、30日 「スタジオ・ポラーノ」稽古

10月5日 希望舞台・浅野さん忍ぶ会

10月21、28日 11月11、18日 小金井女声合唱団

25～27日 「バラエティ劇場」稽古・公演

11月17日 「クリスタルボウル音浴会」稽古

隔水曜・木曜日 朗読教室

毎火曜・木曜日 ヨガ教室

【二階サロン】

9月7日 緑町第2町会役員会

11月2日 緑町第2町会役員会

9日 緑町第2町会「防災・講座」

毎水曜日 熟年会

NPO現代座の会員になってください

- 年間4回発行の活動レポートをお送りします。
- 会員による企画行事をお知らせします。
- お申し出があれば、上演舞台の録画DVDをお送りします。

★年会費（現代座レポート購読料を含む）

一般会員 3,000円

協賛会員 10,000円（1口以上）

郵便振替口座番号 00110-7-703151 NPO現代座